

SERIES 明日のスポーツをめざして

岩手県陸上競技協会

常務理事(強化部長) 似内利正

第65回国民体育大会「ゆめ半島千葉国体2010」において、陸上競技選手団は前回国体の入賞得点を倍以上に伸ばす34点を獲得することができた。

これは、日本ジュニア・ユース選手権大会円盤投げで大学生に次いで準優勝(高校日本新記録樹立)した米沢茂友樹選手(福岡高3年)や全日本中学校陸上競技選手権大会女子200mに中学日本新記録で優勝した土橋智花選手(見前中3年)をはじめとする少年種目の活躍に寄るところが大きかった。

全日本中学校陸上競技選手権大会では土橋選手を含めて8人の選手が入賞したが、これは定期的な強化合宿の成果はもとより、指導者・選手の一休感が選手の力を十分に引き出すことができたと考えられる。

従来は、小学生・中学生・高校生・大学一般の強化担当者がそれぞれ強化を進めてきたが、数年前から一貫指導体制が充実し、指導陣は試行錯誤を繰り返しながらも少しずつ成果をあげてきた。このことが今国体のみならず、今シーズンの各種大会の成果につながったものと思われる。そして、それは国体前の強化合宿や国体期間中にも年代を超えた中学、高校、一般の選手間のコミュニケーションの充実が見られたり、お互い協力しあ

いながら競技に取り組む姿勢が顕著に表れ、競技力の発揮に大いに効果があった。

一方、社会人選手を取りまく環境は昨今の雇用情勢と相まって、非常に困難になっているのも事実で、今国体でも成年種目のほとんどを大学生に頼らざるを得なかった。来るべき2016年国体に向けた選手育成を考えるに、社会人選手の環境整備に向けた検討はなおざりにはできない。今後関係機関と協力しながら模索していきたい。

今回の国体に出場した選手の多くは、来年本県で開催される北東北インターハイの主力でもある。国体は故障のため欠場したが、日・韓・中ジュニア交流陸上競技会三段跳び優勝の村松将嘉選手(釜石高2年)や、今回、競技力を十分に発揮できなかった選手たちも来季目指して練習を再開した。

これらの選手たちが2016年岩手国体で、成年競技者として活躍するために、その資質をさらに開花させるべく様々な観点からの検討を行ないたいと思っている。

県体育協会はもとより、関係各位のご助言、ご指導に感謝を申し上げ、さらなる飛躍を期して今後も努力していきたい。

